福岡大学での44年をふりかえって

人文学部教育・臨床心理学科教授　皿　田　洋　子

44年という歳月はあっという間だった。最初の26年間は病院の精神科で臨床心理士として患者さんやご家族とともに“心の病気”に取り組んできた。精神科の治療とは外科のように短期で終わらず、病気を受け入れてその上で自分らしく地域の中で生活していけるようになる課程で、患者さんとともに一歩一歩積み重ねてゆくものである。その中で患者さんが少しづつ自分らしさを取り戻されることが喜びであった。中には残念なこともあったが、どうすれば今日よりも気持ちが楽になられるかを考えるのは私の性に合っていたように思う。

32年前、38歳の時に「social skills training（SST）」と出会った。上司である精神科の西園昌久教授からアメリカの学会で SST が注目されていると紹介され、まだ、日本で取り組まれてないということに大いに刺激されて、同僚と一緒に翻訳しながらはじめたのである。SST とは、簡単に言えばコミュニケーション・スキルのトレーニングで傷つきやすい患者さんが安心して取り組めるように配慮されたもので、現在では福祉、教育、司法の領域においても活用されている。この SST を用いての研究「精神分裂病を対象とした生活技能訓練とその効果」で博士号を取得できたのだが、いろいろな方、特に患者さんの協力がなかったら実現できなかったと改めて思うのである。患者さんに「アメリカで社会復帰に効果があると報告されている“SST”をやってみない？」と話しをすると、患者さんの一人が、「効果があると言われることはやってみよう」と他のメンバーを誘ってくれてデイケアではじめることができた。私の拙いやり方を文句ひとつ言わずに忍耐強く付き合ってもらえたからまとめることができたと言っても過言ではない。論文博士の取得には第二外国語の試験があって、１か月間フランス語学科の山崎卓先生に個別指導をしていただいて合格できたのだが、今思えばその時から人文学部とのご縁が始まったのだった。

こうして SST がその後の私の援助活動、教育活動の基盤となり、SST 普及協会に属し、看護師、学校の教師、少年院の職員、保護司さんにも SST の指導をするようになった。私は同僚からよく「どこからエネルギーが出てくるの？」と言われることがあったが、“好奇心”が少し強く思い立ったら突っ走るところがあり、まわりの人はハラハラして手を貸さざるを得ない状況になるようだ。患者さんの家族の方を対象に「家族 SST」をはじめた時もそうだった。家族 SST とはご家族に病気についての説明とかかわり方の SST を組み合わせたもので、数名の家族とグループで実施する計画を立てた。しかし家族に呼びかけると「もういいです。あきらめていますから……」と断られた。家族の協力が患者さんに絶対必要という思いから「そこを何とか……」とお願いして、ようやく「先生がそうおっしゃるなら……」と参加してもらえたのだった。そのご家族の患者さんは再入院することなく、地域で一人暮らしできるまで回復されている。あの時引き下がらないでよかったなあとつくづく思うのである。「家族 SST」から学んだことは、心の病気は患者さんだけががんばってもうまくいかない、「病気」を患者さん、家族、スタッフ、そして地域の人々とスクラムを組んでいくことの大事さだった。それがきっかけで、地域の人と一緒になって患者さんの自立を手助けしようと「アットホーム　共同作業所」を七隈小学校の側に、人文学部に移った2000年に開所した。メンバーとスタッフが手作りで作ったケーキやクッキーを販売しているが、働いて、お金を得ることを体験することでみんな元気になっていった。メンバーたちは「病気がよくなっても自分たちを世の中の人は受け入れてくれるのだろうか？」という思いをもっており、自分たちの仕事を社会の人から認められるということは

非常な喜びであるようだ。幸運にも大学のご厚意により病院１階にショップをオープンすることができたことは、私にとっても、メンバー、そしてご家族にとっても非常に勇気づけられたことだった。患者さんにとっての大きな課題は、周囲の人の偏見と本人自身がかかえる偏見である。ショップで「おいしい」と言って買ってくださるお客さんに出会うことで彼らの気持ち、考え方は徐々に変わっていっている。ショップはそういう場で、体力が続く限りメンバーと一緒に“売り子”を続けていきたい。院生もこの作業所には本当によく手伝ってくれている。場所を見つけてくれたのも院生で、今の所長もそして数名の職員も修了生である。今後は公認心理士の実習場所の一つとなるが、よりよい地域支援を指導できる場になればと思っている。

病院新館１階のアットホームのショップ

SST が私の教育活動の基盤となったと述べたが、臨床心理士をめざす学生、そして教師をめざす学生にはいつも SST を体験させてきた。学生たちはまだ SST の必要性を実感していないようだが、ヒューマンディベロップメントセンター（HD センター）で春と秋のセミナーでは参加者は非常に熱心に取り組んでくれた。今の学校の現場では不登校、いじめ、自死などの適応にかかる問題が多く、教師たちはその対応に疲弊しきっている。子どもの数は減少しているのに不登校は増え続けていて、これらの問題の背景の一つにあげられるのが子どもたちの自尊感情の低さ、コミュニケーション能力の乏しさである。SST がまさに必要な時代といえる。私より一足先に退官された教育・臨床心理学科の林幹男先生がこの問題に取り組もうとブランディング事業に手をあげられた。私の専門である SST を小学校、中学校に出向いて実施するこの計画に最初は定年前の私にできるか不安になったが、一方で心のどこかで挑戦してみたい気持ちがあった。この取り組みは小学校４年生と中学１年生からスタートして同じ生徒に３年間継続して行うもので、まだこのような縦断的研究報告は見当たらない。助手の本徳勇気先生に助けてもらって、院生たちとスクラムを組んで２年行ってきた。年に６回ではあるが、子どもたちは楽しみにしてくれていて、担任の先生からも子どもに変化が見られるようになったとうれしい報告を受けた。この秋に北海道で行われた SST の学術集会でこれまでの経過を報告してきたが、参加者から「よい研究だ」と関心を示してもらえた。３年間成し終えて文部科学省を驚かせる報告書ができればいいなあ……と、でも私は退職するので後を引き継いでくださる先生たちにがんばってもらいたい。退職後も後方から応援していければ幸いである。

これからどんな生活が待っているのかまだ想像がつかないが、ライフワークである“心の病”への支援、SST の普及は続けていきたい。そのためには骨粗鬆症が悪化しないようジムに通って元気に過ごしたい。たくさんの方々に支えられて無事退職を迎えられることができたことに感謝しながら、そしてみなさまのこれからの発展を祈ってこの稿を閉じることとする。ありがとうございました。

小学校での SST

未来はすでに始まっている

薬学部教授　須　本　國　弘

福岡大学に赴任してから45年以上が経過した。毎日その日の仕事や課題に対応するのに精一杯であったように思える。あっという間の出来事のように思い出されます。

部屋の片づけなど時間を見ながら少しずつ行っていると、大学図書館から書籍返却の連絡のメイルがきた。「福岡大学図書館からのお知らせです。現在貸出を行っている資料の返却期限が近づいています。対象の資料は以下のとおりです。」返却期限が迫っていたのは、以前から二十冊余り借り出していた、詞華集日本漢詩や詩集日本漢詩であった。

「休道他郷多苦辛　同袍有友自相親
　柴扉暁出霜如雪　君汲川流我拾薪」

廣瀬淡窓の漢詩は暗唱していたが、手元にある儒学者の漢詩を本の詩集を参考に一部読みづらい漢詩の解読を試みようと思っていたものである。今まで数回参考にしたこともあったが、時間的余裕もなくまだ殆ど利用することも無くそのままにしていた。複雑な心境でこれらの本は退職を前にしてすべて返却した。

まだ部屋は本や印刷物でごちゃごちゃの状態である。焦っていると、退職にあたって研究雑話という題目での原稿執筆依頼が舞い込んできた。書き留めることは少ないように思えるが大学での生活などを振り返り思い出しながら、責務を果たしたいと思います。

45年以上前にスタートした福大キャンパスでの生活

福岡大学キャンパスでの研究生活は昭和48年にさかのぼる。当時の建物は現在多くがなくなってきている。現在の正門前のプールは昔のままの姿で残っている懐かしい施設である。これももうじき建て替わると聞いている。ひょうたん池の横の正門付近は昔とあまり変わらず散歩するのが楽しい空間である。研究活動に疲れたりした時や昼休みの散歩には薬学部から丁度良いくらいの距離である。「常に良い目的を見失わずに努力を続ける限り、最後には必ず救われる。（ゲーテ）」という言葉を、本当だろうかと考えて池の周りをうろついた記憶もある。

半世紀近く継続した生物活性化合物の探索

福岡大学に赴任後所属した医薬品化学研究室では、創薬を目指し、教員や学生達とともにリード化合物の探索に向け研究を行ってきた。新しい医薬品の創製には様々なアプローチが考えられるが、合成した化合物が新薬のリード化合物となることを期待しながら、他大学のよき共同研究者（活性評価依頼）などを含めて活性化合物の探索研究を継続してきた。これらの研究の基盤は有機化学であるが、いろいろな「くすり」や創薬のヒントとなる生物活性化合物の構造式を三次元的にとらえながら研究を展開してきたつもりである。生物活性化合物の探索は、中枢神経作用薬や循環器作用薬あるいは近年では糖鎖の機能に関連する新しいタイプの分子認識能を有する化合物の探索を通して、抗ウイルス活性化合物、抗菌活性化合物あるいは抗がん活性化合物の探索を行ってきた。ピロリジジン関連複素環化合物の研究を通して抗不整脈薬サンリズム（ピルジカイニド塩酸塩）の新薬開発に関われたことはよい経験となり幸いであった。小生の研究は一貫して生物活性分子の探索研究であったが、まるで宝探しの感がしないでもない。これまで開発されている有用な多数の薬の発見が「セレンディピティー的要素」を含んでいることに思いを馳せ研究を継続してきた。薬学部に勤務する者として、人に役立つ何かを求めて探求してきたつもりであるが、退職を前にして夢はいまだ実現からは程遠く成功したという実感はない。福岡大学で勤務した約45年間、色々な研究所や大学との

交流を行い共同研究も数多く行った。本学での活動を通じて出会った多くの共同研究者の方々に感謝の気持ちを捧げたい。

大学に感謝

半世紀近くに及ぶ長い期間には、海外への留学の経験、所属する学会参加や発表の機会を与えて頂いた。毎週の講義準備には時間も要することも多いが講義は私の大学勤務での楽しみの一つであった。学部の懇親会や福友会における野球観戦なども楽しい思い出であり、勤務させていただいた福岡大学には心から感謝する次第です。研究室の卒業生が各地で活躍している姿を見れるのも大学に勤務した者ならではのうれしさと感じています。「感謝の心が高まれば高まるほど、それに正比例して幸福感が高まっていく。(松下幸之助)」とは今日まで半世紀近く福岡大学に勤務できたうれしさを代弁する現在の心境です。

メイルのやり取りと老後

福岡大学で勤務した約45年間、色々な研究所や大学人との交流を行い共同研究も多く行った。研究をはじめた20代の頃（1970年代）は、連絡手段は紙媒体での手紙あるいは電話連絡が主体で投稿原稿の作成には労力を要した。次第に電子媒体のメイルが主流となってきた。初めて自分の机の上にパソコンを設置してメイルでの友人との交信が上手く行った時の嬉しい感動（？）は今も思い出します。学会参加、論文投稿、種々の原稿作成や連絡など研究にメイルや電子媒体を利用した作業は欠かせないものとなった。その後年を追う毎に、科学文献の検索などもデータベースを利用するコンピュータ検索が充実してきた。

65歳を過ぎた数年ほど前から、時々退職後のこれからの生活をアドバイスするメイルを受け取るようになった。

＊「、、、、、、、貴方も退職後のために、何をしたらいいか、ぼつぼつ考えたらいいと思います。私の大学の同級生や後輩たちは、いろいろやっていますが、油絵、水彩画、 書道、エッセー執筆、小説執筆、写真、打楽器、ボランティア活動などを聞いています。、、、、、」。

＊「、、、、、、第二の人生を如何に生きるかということを今からぼつぼつと考えてみてください。それからちょっと早いかもしれませんが、身辺整理を始めています。捨てるものは思い切って捨てるという決心が肝心です。、、、、、、」。

＊「、、、、、貴兄もあと１年と少しとか、A 君は今年の春に定年で辞めたと思います。貴兄は長い方ですよ。、、、、、、、、、ボツボツ、辞めた後のことを考えないといけませんよ。有機化学は一般の方には理解してもらえませんから役に立ちません。もし既にやりたいことがあればいいですが、別の分野のことを始めるか、習うか、近くの大学の成人向け講義に参加するとか、いろいろあると思います。何かのグループに入ると、その中で新しい友人ができますよ。、、、、、、、」。

否が応にも退職後の生活を考えさせられるメイルである。老後のライフワーク的楽しみも探さないといけない。どこか素敵な老人ホームも探す必要がありそう。それより、一人になって話す相手もなく野垂れ死にするのではないかという不安（恐怖）も頭に浮かぶ。何とか素敵に老後を生きようと自分に語り掛けることしばし。

これから

一年先の自身の状況は全く分からないが、退職を前にした70歳に一念発起、この夏愛用していたガラケーをスマホに変えた。WHOの指摘するインターネット関連の依存症は気になるが、認知症に襲われず、画面を見るのが苦にならない視力を保ち、意志に従って指が思い通りに動くなら、この新しいスマホの機能は余裕のできた時間を持て余すことを少なくすることに少しは役立つようにも感じた。

50年近くをこのキャンパスで過ごし福岡大学に役立つ何かが出来ただろうかと暫し考える。研究を始めた20代に立てた目的「病めるひとに役立つ何かを」は達成できたのだろうか。答えが見いだせない。ただ、「一見して人生には何の意味もない。しかし一つの意味もないということはあり得ない。(アインシュタイン)」という先人の言葉に思いをはせる心境にたどりついた。

未来はすでに始まっている。福岡大学の発展を心から祈ります。